

# 無限次元ガウスの消去法を用いた radii-polynomial approach の改良

関根研究室 2131701 齋藤 悠希

# はじめに

微分方程式を計算機で解くとき,  
計算機の資源が有限という特徴のために  
方程式の解に誤差が発生する.

→ 解の誤差を評価し, 精度を保証する.

精度保証付き数値計算

# 背景 - van der Pol 方程式

## van der Pol 方程式

$$\frac{d^2 x}{dt^2} - \mu(1 - x^2) + x = 0$$

- 未知関数 :  $x(t)$
- パラメータ :  $\mu > 0$

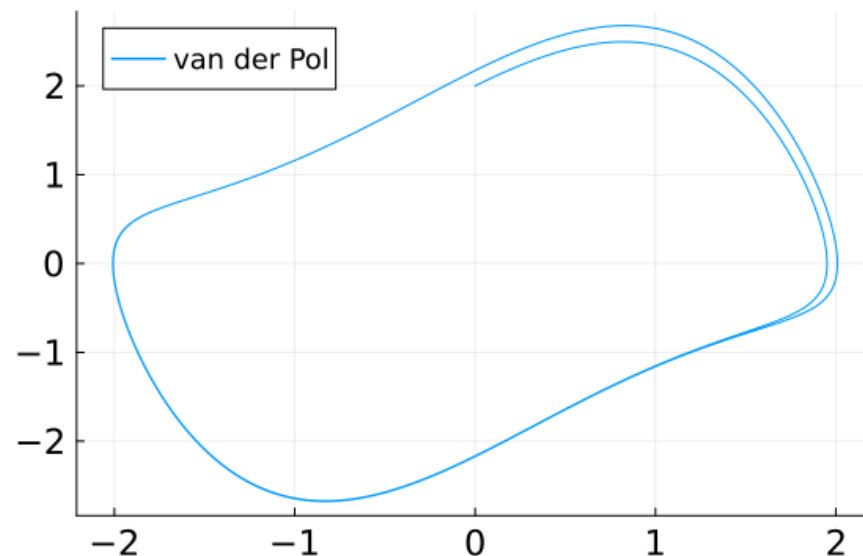


図 1: van der Pol 方程式  
初期値  $(0, 2)$ ,  $\mu = 1.0$

# 背景 - 先行研究

## radii-polynomial approach [1]

$X, Y$	Banach 空間
$\mathcal{L}(X, Y)$	$X \rightarrow Y$ への 有界線形作用素の集合
$A^\dagger$	$\mathcal{L}(X, Y)$ の要素
$A$	$\mathcal{L}(Y, X)$ の要素
$F$	$C^1$ -Fréchet 微分 可能な作用素

$$\|AF(\bar{x})\|_X \leq Y_0$$

$$\|I - AA^\dagger\|_{\mathcal{L}(X)} \leq Z_0$$

$$\|A(DF(\bar{x}) - A^\dagger)\|_{\mathcal{L}(X)} \leq Z_1$$

$$\|A(DF(b) - DF(\bar{x}))\|_{\mathcal{L}(X)} \leq Z_2(r),$$
$$\forall b \in \overline{B(\tilde{x}, r)}$$

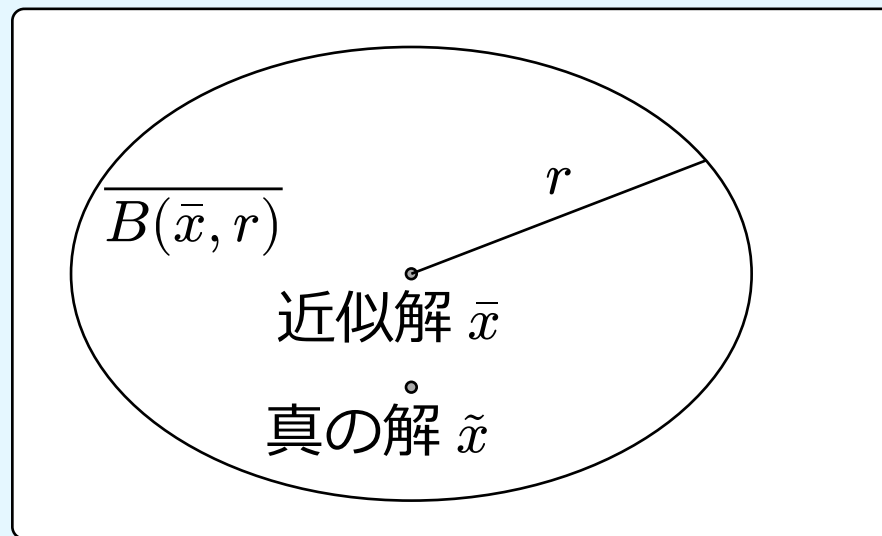
# 背景 - 先行研究

## radii-polynomial approach [1] (続き)

radii polynomial を以下で定義する.

$$p(r) := Z_2(r)r^2 - (1 - Z_1 - Z_0)r + Y_0$$

$r_0 > 0$  かつ  $p(r_0) < 0$  なら,  
 $F(\tilde{x}) = 0$  となる解  $\tilde{x}$  が  
 $\overline{B(\bar{x}, r)}$  内に一意に存在する.



参考 : [1] 高安亮紀, Julia 言語を使った精度保証付き数値計算のチュートリアル

## 背景 - 先行研究

西窪の研究[2]では, radii-polynomial approach において作用素  $A$  を,  
「 $A^\dagger$ の近似逆作用素  $\rightarrow$  真の逆作用素」とおき,

$$A \approx DF(x)^{-1} \rightarrow A = DF(x)^{-1}$$

$$AA^\dagger \approx I \rightarrow AA^\dagger = I$$

ノルムの計算を簡略化.

$$\text{例)} \quad \|A(DF(\bar{x}) - A^\dagger)\| \leq Z_1 \Rightarrow \|ADF(\bar{x}) - I\| \leq Z_1$$

$\rightarrow$  精度は大きく低下しない, 計算時間は短縮

参考: [2]西窪壱華, radii-polynomial approach における零点探索手順の削除

# 既存手法と問題点

無限次元サイズの行列  $DF(\bar{x})$

→ 有限で打ち切り, コンピュータで計算

打ち切った分を調整するため, 重み付きノルムを使う

重み付き  $l_1$  ノルム

$$\|a\|_{\omega} := \sum_{k \in \mathbb{Z}} |a_k| \omega_k < \infty$$

# 既存手法と問題点

## 重み付き $l_1$ 空間

$$l_{\omega}^1 = \left\{ a : \|a\| := \sum_{k \in \mathbb{Z}} |a_k| \omega_k < \infty \right\}$$

## $l_1$ 空間

$$l_1 = \left\{ a : \|a\| := \sum_{k \in \mathbb{Z}} |a_k| < \infty \right\}$$

ノルムの値は「重み付きノルム」 $>$ 「 $l_1$ ノルム」

→ 条件の不等号を満たすために、 $a$ が限られる。

→ 精度保証できる問題が限られる。



# 目的

重みを外し,  $l_1$  空間上で計算することで,  
radii-polynomial approach の適用できる問題の範囲を増やす

# 提案手法

$l_1$ 空間で計算するために, 無限次元ガウスの消去法[3]で作用素を計算



作用素 $DF$ が全単射であることを確認しなければならない.

# 提案手法 - 概要

$$DF(\bar{x})\phi = F(\tilde{x})$$

無限次元ガウスの消去法を用いて,  $DF(\bar{x})^{-1}$ の全単射性を確かめる.

参考 : [3]Kouta Sekine, Mitsuhiro T. Nakao, and Shin'ichi Oishi, “Numerical verification methods for a system of elliptic PDEs, and their software library”

# 提案手法 - 無限次元ガウスの消去法

射影演算子 $\Pi_N$ と作用素 $A$ より, 以下の作用素を定義する.

$$\begin{aligned} T &:= \Pi_N ADF(\bar{x})|_{X_1} : X_1 \rightarrow X_1, & B &:= \Pi_N ADF(\bar{x})|_{X_2} : X_2 \rightarrow X_1, \\ C &:= (I - \Pi_N) ADF(\bar{x})|_{X_1} : X_1 \rightarrow X_2, & E &:= (I - \Pi_N) ADF(\bar{x})|_{X_2} : X_2 \rightarrow X_2 \end{aligned}$$

$DF(\bar{x})\phi = F(\tilde{x})$ は, 作用素の定義より, 以下に変形できる.

$$\begin{pmatrix} T & B \\ C & E \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \Pi_N \phi \\ (I - \Pi_N)\phi \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \Pi_N AF(\tilde{x}) \\ (I - \Pi_N)AF(\tilde{x}) \end{pmatrix}$$

# 提案手法 - 無限次元ガウスの消去法

$S := D - CT^{-1}B$  としたとき,

$$\|I_{X_2} - S\| < 1$$

となれば,  $S$  は全単射となる.

$S$  は,  $A$  と  $DF(\bar{x})$  から求められる.

$$\begin{aligned} S &:= D - CT^{-1}B \\ &= (I - \Pi_N)ADF(\bar{x}) - ((I - \Pi_N)ADF(\bar{x})) \\ &\quad (\Pi_N ADF(\bar{x}))^{-1} (\Pi_N ADF(\bar{x})) \end{aligned}$$

# 実行環境

表 1: 実験環境

環境	詳細
CPU	12th Gen Intel(R) Core(TM) i7-12700
OS	Ubuntu 24.04.1 LTS
コンパイラ	Julia 1.11.2
微分方程式解答ライブラリ	DifferentialEquations v7.10.0
数値計算ライブラリ	IntervalArithmetic v0.20.9

# 実験結果

表 2: フーリエ係数の次数の変更による  $\|I_{X_2} - S\|$  の比較

次数	$\ I_{X_2} - S\ $
50	0.22815114629236252
100	0.11455533660051737
150	0.07655718822651922
200	0.05749210273025131

- $\|I_{X_2} - S\| < 1$  を満たした.
- 次数が上がるにつれ, ノルム値が減少.

# まとめ

- 無限次元ガウスの消去法を用いた radii-polynomial approach の改良手法を提案した
  - 数値実験での検証により,  $l_1$  空間上で  $DF(\bar{x})$  が全単射であることがわかった.
- 提案手法で改良可能であることがわかった